



聞き手

木村 誠
編集委員



リバーナース(河川の看護師)

天本 豊子

さんに聞きました

AMAMOTO Toyoko



□ 2006年4月11日 土木学会役員会議室

川に親しみ、川に学ぶ

——天本さんは、九州大学流体研究所や水工土木学科河川研究室に文部技官として従事し、定年退官後、リバーナース(河川の看護師)としてさまざまな活動をなさっています。リバーナースを名乗られたきっかけはどのようなことからですか。

天本——研究室の先生方が九州の各河川を担当され、河川工学、水理学、水文学、自然災害、防災工学、河川環境などその他の分野も含めて研究されており、学生たちと河川調査など、44年間河川にかかわってきました。私自身も子どものときからずっと水辺に縁があり、川から潤いを

もらい育ち暮らしてきましたので、子どもたちが安全な水辺で川に親しみ、やさしい視点で自然に触れ、そこで育まれる植生物からも生きる命を理解し、健やかな心を培うようにと、日本で唯一「リバーナース」と自称し活動を続けることにしたのです。

最近、子どもたちの川離れが気になります。川は危険なところという、親の不安な気持ちもわかりますが、本来、子どもたちは水辺が好きなのです。そこで、地域の人たちと協力し、やすらぎの水辺で魚釣りや植生物の生態を知ることによって情操を養ったり、子どもとともに安全な川に入る体験を行ったりしています。

行政側でも、子どもたちの自然離

れが進むなかで、水辺を環境学習や体験学習の場として活用し、水辺に楽しく親しむ「子どもの水辺サポートセンター」などを設立しています。

小学校で低学年の子どもたちに川のことを話しますと、「川はなぜ上流と中流と下流があるの?」と、素朴な質問が飛び出し、その発想の豊かさに驚かされることがあります。水は高い所から低い所へ流れますが、川の水は飲み水にもなり、農業や工業のための水にもなり、たくさんの機能があることなどを話しますと「わかりました」と目を輝かせてくれます。その姿を見ているとうれしくなっていて、これからもリバーナースを続けていこうという気持ちになり

ます。最近は、子どもたちだけでなく、次代を担う子どもを生み育てる若い女性たちや母親たちとも積極的に接し、川の大切さを語っています。

九州もそうですが、日本には多くのきれいな川や美しい景観があります。まさに山紫水明の国、日本に生まれた幸せを誇りにして、子どもたちには生きてほしい、私はそう願っています。

■ 行政と地域のパイプ役に

——天本さんは、子どもたちや女性と河川をつなぐ役割を果たされていますが、河川環境や水辺の景観を考えるとときには、行政と地域のつながりも大切ですね。

天本——戦後の河川整備で、治水、利水の機能をもつ施設整備は充実してきています。1997年に『河川法』が改正され、川づくりの目的として治水、利水に、河川環境が加えられ、豊かな自然を保全し、創出することをめざした「多自然型川づくり」が実施されています。河川のもつ多様な自然環境や水辺空間などが、潤いのある生活環境の舞台として期待されるようになり、自然再生事業なども積極的に推進されています。親水護岸や水辺の景観を考え、つくると

ときには、地域の人たちと行政が学識者を交え、お互いに理解し合いながら進めていかなければなりません。こうしたことから、私自身、行政と地域のパイプ役として、国土交通省九州地方整備局の機関誌『水辺だより』のモニターとして、川の現地調査、水辺環境や自然観察、川の景観や水辺の楽校見学、地域の環境問題の学習会、川を基点とした、町の魅力づくりのワークショップ、防災行事などにも参加しています。

河川の調査では、川が好きなので、定年後も九州の百カ所以上の源流や湧水地を探查しています。愛してやまない川に携われるということで、今も幸せを感じています。

■ 源流での少年との出会い

——美しい川や水辺環境に対する関心や理解も、最近ではかなり高まっているのではないのでしょうか。

天本——各地で水質の汚い川のワーストが発表されていますが、今は地域の人たちが立ち上がり、川の清掃が行われています。私が旧制高女を卒業し、大学に勤務したのは、戦後まもない1949年でした。当時は自然災害が大きな問題となっており、1953年には九州で大水害が起こり、筑後川が氾濫し、多くの犠牲者が出ました。その直後、全国の大学で自然災害研究班がつくられ、現地調査に参加し、災害実態の写真撮影から現像、焼き付なども行いました。水害の恐ろしさを肌で感じる出来事でした。このときから災害を常に意識して暮らしています。災害研究の成果はハイレベルで、災害調査解析、防災予測、災害予知機能などに貢献

しています。

昭和ヒトケタの世代は、小学校の教科書で、1854年の安政南海地震のとき、村民を避難させるため、自分の田んぼに積まれた収穫の稲束(稲むら)に火を投じて急を知らせ、村民の命を救ったという『稲むらの火』に感銘を受け、防災の大切さを学びました。防災や自然を大切にす

る心を育むには、子どもの頃からの教育が重要です。ある源流を訪ねていたときに、川の水をじっと見ていた少年に出会い、川のそばで勢いよく流れる水や、川に棲む生き物のこと、山の森から川へ、そして海へと流れ、大気となって雨になる自然の循環のすばらしさを話したことがありました。「川のことをもっと知りたいときには、ここにね」と、少年に名刺を渡して別れました。数日後、母親から「里に預けていた登校拒否の息子が、目を輝かせて学校に通いだしました」という感謝の電話を受けました。それから十数年、私はすっかり忘れていたのですが、最近、そのときの少年の母親から「立派に成人し、今は頼もしい社会人になりました。ぜひ会ってください」という喜びの電話をもらいました。私もうれしくて、いつの日か会う約束をしました。川や水辺が幼い心や人を癒し、救ってくれたのです。

技官として学生たちとともにすごした日々は貴重な人生でした。卒業後の社会での活躍を誇りに思います。時代を支え、暮らしの安全を守る土木技術者たちは、私にとっていつもわが子のような大切な存在です。土木は国づくりの原点だと思います。

